

ゼカリヤ書 9 : 9~10

ルカによる福音書 19 : 28~40

「あなたの王が来る」

【前奏】

【招詞】 イザヤ書 57 : 15

【祈祷】

【聖書】 ゼカリヤ書 9 : 9~10、ルカによる福音書 19 : 28~40

【説教】 「あなたの王が来る」

<受難の一週間>

今日は、「棕梠の日」と呼ばれる日です。棕梠の日とは、イエスさまが十字架に向かわれる一週間である、「受難週」の始まりの日を指します。

新約聖書の、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書は、このイエスさまの十字架の受難の一週間を記すために、多くの章を割いています。イエスさまの十字架の死は、わたしたちの罪を贖うために、神の御子イエスさまが成し遂げて下さった、決定的な救いの出来事だからです。

イエスさまが、そのようにして十字架に架けられたのは、イスラエルの民が神さまを礼拝する神殿がある「エルサレム」という町の、ゴルゴタという場所でした。

その十字架の出来事に向かって、イエスさまがエルサレムの町に入られる様子を、四つの福音書すべてが記しています。今日のルカによる福音書で語られていた箇所もそうでした。このエルサレムに入られた日が、「棕梠の日」と呼ばれているのです。

「棕梠」というのは「なつめやし」という植物の別名です。わたしたちがこの宮崎でよく目にする、ヤシの木の仲間です。この「棕梠」、「なつめやし」の名前は、今日のルカによる福音書には出てきません。しかし、ヨハネによる福音書では、イエスさまがエルサレムに入られる時に、大勢の群衆が「なつめやしの枝」をもって迎えに出た、と書かれています。他の福音書では、イエスさまがエルサレムの町に入られる時、その通られる道に、人々が自分の服を道に敷いたり、木の枝を切って道に敷いた、とあり、その木の枝がなつめやし、棕梠の葉であったと考えられています。

それで、受難週の初めの日、エルサレムに入られるイエスさまを、人々が棕梠の葉をもって出迎えたことから、この日を「棕梠の日」と呼んでいるのです。

<凱旋>

さて、この棕梠という植物は、戦に勝つ、戦勝、優勝、という意味を持ち、かつては戦争に勝利した軍隊の凱旋パレードで持ち歩かれたと言われています。

つまり、ここでイエスさまが棕櫚の葉をもった人々に迎えられてエルサレムに来られた、というのは、イエスさまは、勝利の凱旋をする王さまとしてエルサレムへ入られた、ということなのです。

しかし、そうであるならば、それはあまりにも貧しく、弱弱しく、惨めで、滑稽な凱旋であった、と言わざるを得ません。

戦勝の凱旋パレードの中心は、軍隊の司令官であり、将軍であり、皇帝、王さまです。

ローマ帝国では、凱旋の時には、王は四頭立ての馬に引かせた戦車に乗り、多くの兵隊や、多くの戦利品や、宝物を携えて、豪華絢爛な行進をしたということです。そうして、軍事力、武力、経済力の強さを、人々や国々に見せつけるためです。

普通、王は敵国との戦いに勝利することによって、自分の国民を守り、平和を築きます。武力をもって敵を制圧し、滅ぼし、徹底的に打ち負かす。そうして勝利し、戦いを終わらせた王は、平和をもたらした王として崇められるのです。

しかし、イエスさまは、四頭立ての戦車ではなく、まだだれも乗ったことのない、よたよた歩くことしかできない、小さな子ろばに乗って来られました。

子ろばに乗って凱旋する王。強さや威厳は全くありません。しかしまさにこのお姿にこそ、イエスさまがどのようなお方か、どのような王か、ということが示されているのです。

<預言の成就>

今日のルカによる福音書では、まずイエスさまご自身が二人の弟子を使いに出して、こう言われたといひます。

30 節『向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、だれかが、「なぜほどくのか」と尋ねたら、「主がお入り用なのです」と言いなさい。』使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。』

イエスさまが、二人の弟子たちに、向こうの村へ行ったら子ろばがいるから、それを連れてきなさい、とお命じになりました。弟子たちが行ってみると、すべてが言われたとおりであった、とあります。

「言われたとおりであった」。イエスさまが、先を見通しておられ、子ろばがいること、また子ろばの持ち主に声を掛けられるということ、すべて言い当てられました。

確かに、イエスさまが言われたことが実現した。これは重要なことです。しかし、ここにはもっと重要なことが示されています。

それは、今日の旧約聖書のゼカリヤ書 9：9～10 に語られていたこと。父なる神さまが、イスラエルの民に約束しておられた御言葉、つまり、わたしたちすべての人間の救いのためのご計画が、イエスさまにおいて確かに「言われたとおりで」成就した、ということです。

旧約聖書のゼカリヤ書にはこうありました。9：9～10 です。「娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」

ここに、「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って」とありました。

見よ、あなたの王が来る。あなたの王。わたしたちの王です。この方は、ろばに乗って来る。イエスさまは、まさに旧約聖書で預言された、すべての諸国の民に平和を告げる王、わたしたちの王となられるために、子ろばに乗って来られたのです。

それは、旧約聖書において、神さまの御言葉に「言われたとおりであった」のです。

<本当の平和とは>

では、なぜわたしたちの王、平和を告げる方、イエスさまは、貧弱な、小さな、子ろばに乗って来られるのでしょうか。

…それは、イエスさまに、軍馬は必要ないからです。ろばとは、戦車を引くのではなく、人間の重荷を背負う動物です。イエスさまは、敵を蹴散らし、滅ぼして、わたしたちに平和をもたらす王ではなく、わたしたち一人一人の罪の重荷を、御自分の背に負って下さることによって、わたしたちに平和をもたらして下さる王さまなのです。

わたしたちは、敵に苦しめられる時。責められる時。痛めつけられている時。この敵を滅ぼしてほしい。悪を根絶やしにしてほしい。神さまの御力で、どうして敵や悪を焼き尽くして下さらないのか。そのように思うことがあるかも知れません。

わたしたちは、自分を守って下さる王に、そのような絶大な力で、わたしの敵と戦い、相手を滅ぼして下さることを期待するかも知れません。

しかし、神の御子イエスさまは、そのように武力によって敵と戦い、勝利を収められる方ではないのです。

そもそも、わたしたちの敵とは、一体何でしょうか。わたしたちの本当の敵は、自分に敵対する人や、攻撃を加えてくる者である以前に、まず、わたしたちすべての人間を捕らえている、罪と悪の力なのです。

罪とは、神さまに敵対すること。神さまの思いに従うのではなく、自分の思いに従って生きることです。だから、わたしたちは自分勝手な思いを抱き、自己中心的になり、隣人と共に歩むことができず、その結果、互いに敵対し、傷つけ合い、苦しめ合っているのです。

ですから、わたし自身もまた、誰かの敵であり、誰かを傷つけ、誰かを苦しめたかも知れません。そうであるなら、もしわたしたちが、敵を滅ぼして平和が来ることを望むなら、滅ぼされるのは、わたしたちの方かも知れないのです。

そして何より、わたしたちが、神さまに敵対しています。罪に捕らえられ、自分ではどうしようもなく、神さまから離れてしまっています。神さまに敵対し、神さまとの間の平和を破壊しているのは、まさに罪人であるわたしたち自身なのです。

でも、イエスさまは、そのようなわたしたち、つまり、神さまに敵対する者、背く者、罪を犯す者を、蹴散らし、責め滅ぼすために来られたのではありません。

むしろイエスさまは、敵対する者を愛し、癒し、命を与えるために来られました。それが、父なる神さまの御心だからです。

神さまは、造られたわたしたちが敵対しても、なおわたしたちを愛し続けて下さり、審いて滅ぼそうとはなさいませんでした。

むしろ神さまは、わたしたちが悔い改めること、神さまの御許に立ち帰って、生きることを求めておられます。神と人が共に愛し合い、共に生きること。また、その中で、人と人とも、互いに愛し合って生きることを、望んでおられます。

そのために、神の御子イエスさまは、神さまに背くすべての人の罪を、わたしたちの罪を、すべてご自分が担うために来て下さったのです。罪人の重荷を背負うために。罪人の身代わりとなって死ぬために。そうして、まことの平和をわたしたちにもたらすために、この王は来て下さったのです。

この方こそが、まことの平和を告げて下さいます。まことの「平和」とは、ただ争いが止むこと、戦争がないという状態のことではありません。すべての人間にとって、まことの、本当の平和とは、神さまとの良い関係に生かされること。神さまを知り、神さまを愛し、神さまと共に生きる、ということなのです。

そして、その神さまの愛を知り、神さまに赦されて、神さまと共に生きる歩みの中でこそ。わたしたちは、人と人との間でも、互いに愛し合い、赦し合い、共に生きる、まことの平和を築いていくことが出来るのです。

<あなたの王>

この、まことの平和をもたらし下さる方こそ。武力ではなく、神さまの愛でわたしたちを支配して下さる方こそ。子ろばに乗って来られる、高ぶらない王、イエスさまなのです。

ゼカリヤ書 9：9 には、「彼は神に従い、勝利を与えられた者」とありました。

イエスさまは、神に従うことで、父なる神さまに従順に従い抜かれることで、勝利を与えられるお方です。イエスさまが、父なる神さまに従い抜かれるとは、父なる神さまの、わたしたちへの愛の御心に従って下さる、ということであり、わたしたちを最後まで愛し抜いて下さる、ということです。

それこそが、イエスさまの受難週の歩み、十字架の死への道でした。イエスさまは、わたしたちを最後まで愛し抜いて下さり、わたしたちのすべての罪を代わりに担い、その裁きを代わりに引き受けて、死んで下さったのです。

そして、父なる神さまは、すべての罪人のために、罪の贖いを成し遂げられたイエスさまを、死者の中から復活させ、罪への勝利、悪への勝利、死への勝利をお与えになりました。

そうして、わたしたちの罪は滅ぼされ、死は打ち負かされ、わたしたちには、イエスさまの復活の命が与えられたのです。

このイエスさまこそ、旧約聖書の預言の成就であり、まことの平和を告げて下さる、わたしたちの王なのです。

エルサレムでは、イエスさまを迎えた弟子たちの群れが、声高らかに神を賛美した、とあります。ルカによる福音書 19：38「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」

「天には平和、いと高きところには栄光。」これは、イエスさまがベツレヘムの馬小屋でお生まれになった時、野宿をしていた羊飼いたちに、天使が告げた言葉と似ています。

それは、このような言葉でした。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ 2：14)

神の御子イエスさまのご生涯は、低く貧しい馬小屋からお生まれになることから始まり、苦しみに満ちた呪われた木の十字架に至りました。それはすべて、罪人であるわたしたちを愛し抜いて下さったために、イエスさまが引き受けて下さったことです。

まさにその低くへりくだって歩んで下さったイエスさまのご生涯にこそ、わたしたちを救って下さる、神さまのご栄光が輝き、イエスさまの苦しみの十字架によってこそ、わたしたちの平和が打ち立てられたのです。

このようなお方が、わたしたちの王なのです。平和の王。子ろばに乗られた、高ぶらない王。わたしたちのためになら、ご自分を低くして、ご自分の命を与えてでも、わたしたちを罪から解放し、愛によって支配して下さる王です。

「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」

この受難週、わたしたちは、まことの平和の王であるイエスさまが、わたしたちの罪の重荷を背負って歩まれた、一步一步、一日一日の十字架への道を、深く覚えつつ、悔い改めつつ、共に歩んでいきたいと願います。

わたしたちが出来ることは、このまことの王を、わたしの王として受け入れ、救いの恵みを与えて下さった神さまに、感謝と賛美をささげることです。

そして、わたしたちもまた自分が受けた恵みを携えて、神さまを愛し、隣人を愛し、まことの平和を告げる者として、歩んでいきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま 御名をほめたたえます。

受難週を歩み出します。敵対するわたしたちを、赦し、救い、命を与えるために、平和の王なるイエスさまが来て下さったこと。高ぶらず、へりくだり、子ろばに乗った王として、わたしたちの罪の重荷を背負い、わたしたちの審きを引き受け、わたしたちを愛し抜いて十字架に架かって下さったことを、心からの悔い改めと共に、感謝いたします。

わたしたちが、イエスさまがもたらして下さった平和を、しっかりと受け取り、神さまとの恵みの関係に生かされることが出来ますように。また、隣人との間にも、イエスさまにあるまことの平和を築くことが出来ますように。

わたしたちの心を神さまの思いで満たし、御心に従うことが出来るようにして下さい。

このお祈りをイエスさまに御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 309 「あがないの主に」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】

【讃美歌】 77 「パンくずさえ拾うにも」

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン